

# ディケンズの文学とその時代を広く学ぶ

— Charles Dickens の *The Cricket on the Hearth* に  
見られるレトリックとその効果 —

古 我 正 和

はしがき

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の文章には、様々なレトリックが見られる。ここでは彼の Christmas Books の一つ *The Cricket on the Hearth* の興味深いレトリックの一端を拾い上げ、ディケンズの文学をのぞき込んでみたいと思う。ここではその興味深い生の言い回しに触れるため直接原文を引用したが、そこに至るコンテキストが不明の場合が多く、必ずしも内容を明瞭に把握できない事を考えて、難解と思われる言葉にはできるだけ注をつけ、そこに至るあら筋を述べることにした。

彼の生きたヴィクトリア時代は、その国力において英国の最盛期であった。世界のいかなる他の国にもひけをとらない産業を持ち、それを売りさばく広い市場を持っていたのである。しかしそれに伴う国内の制度は整備されるには至らず、その強力な産業を維持していくための労働条件は、まことに粗末なものだった。現代にみられるような大量生産システムはまだ完成されていない中で、大量に生産しなければ追いつかないほどの海外への需要を賄うために、結局は労働者の過重労働にたよらなければならなかった。

社会福祉の点でもこれと同様であって、農村での「困り込み」に伴う人口の都市集中に対する対策がなされず、都市はスラム化し貧富の差が増大していた。彼の作品にはこのよ

うな英国社会の複雑なものが、からみあって表現されている。

この作品には、上で述べた状況の中の身近に見出される人物、すなわち高利貸、強欲な商人、それと全く逆の、高利貸しや強欲な商人によっていじめられ、苦しめられている人々が登場する。またこの作品では、それと同じほどの密度をもって馬や犬などの動物が出て来る。それに小さな荷馬車で家から家へと配達して回る実直な、不器用な男のジョン (John)。彼よりも20歳ほども年下の、Johnが誰よりも愛する妻 (Mary) が登場して雰囲気賑わしている。本論ではこの作品に見られるレトリックについて考えたいと思う。

## 1. Talker としてのディケンズ、私 (著者) とあなた (読者) の登場

ディケンズには後年公開朗読をしたこともあって、読者に向けて話を書くというよりも聴衆に向かって話しかけるような文体がある。この作品でも冒頭から作者は読者に語りかける。

The kettle began it! Don't tell me what Mrs. Peerybingle said. I know better.  
(*Christmas Books*, Oxford U.P., 1997, p.159)

John Peerybingle の家庭の守護神であるこおろぎが棲みついている炉端で、やかんが沸騰

して音をたてるのと、こおろぎが鳴き出すのとどちらが先だったかの議論である。これは作者からの、読者への語り掛けの始まりである。「私」はその後も出てくる。

To have seen little Mrs. Peerybingle come back with her husband, tugging at the clothes-basket, and making the most strenuous exertions to do nothing at all (for he carried it), would have amused you almost as much as it amused him. (*Ibid.*, p.166)

(下線は筆者、以下の引用も同じ)

ここでは力持ちの John がその荷物を持っていて、妻もそれを手伝っているがほとんど役にはたっていない。それなのに妻の Mary はいかにも力を出しているような格好をしているという滑稽さがあり、それが making the most strenuous exertions to do nothing at all (for he carried it) に出ている。そしてそのことは夫にも分かっており、彼をおかしがらせているのだが、それと同じくらいに、読者もその現場に居合わせれば、滑稽に思われるだろうというのである。それが ...would have amused you almost as much as it amused him に表れている。

ここでは、story-tellerとしてのディケンズが躍如としている。それは文中の you に負うところが大きい。しゃれがふんだんに出てくるが、それを「読者」に意識して「語って」いるのだ。他の例：

You never will derive so much delight from seeing a glorious little woman in the arms of a third party, as you would have felt if you had seen Dot run into the Carrier's embrace. It was the most complete, unmiti-

gated, soul-fraught little piece of earnestness that ever you beheld in all your days. (*Ibid.*, p.229)

注：third party 第三者

unmitigated 純粹の

soul - fraught 心のこもった

最後の感動の場面の、感動を込めた「語り」である。Dot (Mary) は夫のおっちょこちょいが心配で May と Edward との秘密裡の結婚を打ち明けなかったことを悪く思って夫に詫び、夫はそのことに感激してさんざん焦らされたあげく、妻の所へ走り妻を抱きすくめるのだが、上の引用はその時の作者の解説である。I (一人称) の場合もいたる所に見られる。

Mrs. Peerybingle nodded also, fifty times at least. Not in assent — in dumb and pitying amazement; screwing up her lips the while with all their little force (they were never made for screwing up; I am clear of that), and looking the good Carrier through and through, in her abstraction. (*Ibid.*, p.168)

注：looking...through and through.

穴のあくほど見つめて

in her abstraction あっけにとられて

取り扱いの荷物の中に、貪欲な家具商人 Tackleton が、南米から密かに帰国した Edward の恋人 May を横取りするための結婚ケーキがあるのを見て、2 人とも唾然とした時の場面である。括弧の中は作者の解説である。当然ここには作者が顔を出す。

このように、この作品は丁度落語や漫才のように、「話手」が常に背後に居るのである。そのことが良く分かる言い回しを次に紹介し

よう。

He didn't look at her though; he had a wandering and thoughtful eye which seemed to be always projecting itself into some other time and place, no matter what he said; a description which will equally apply to his voice. (*Ibid.*, p.172)

Heとは悪徳商人のTackletonの邸宅の一部に盲目の娘Barthaと共に住み、細ぼそと二人で人形を作っているCaleb Plummerのことである。下線の部分は「上の描写は彼の目だけでなしに声についても当てはまるが」という解説である。

他のI（私）の例：

Did I mention that he had always one eye wide open, and one eye nearly shut; and that the one eye nearly shut, was always the expressive eye? I don't think I did. (*Ibid.*, p.175)

これは著者自身のTackletonの目についての描写である。地の文の中にこのまま出てくる。このように著者と読者が色々な形をとって描写されている。

## 2. 自由間接話法

語りは当然ながら話法に係わる。Dotが初めてJohnの家に連れて来られた時に、初めてChirpという鳴き声を聞いたと言うと、

Oh yes. John remembered. I should think so! (*Ibid.*, p.167)

これは自由間接話法であって 'Oh yes.' John

remembered. 'I should think so!' となるが、Iでなくてheで初めて普通の自由間接話法となる。従って上は直接話法の括弧を外しただけにすぎない。これは言わばDickens流の自由間接話法であって、ここに語り手としての作者が考えられる。次の例には一人称が登場すると同時に自由間接話法の崩れたものが見られる。

The bed was soon made ready; and the visitor, declining all refreshment but a cup of tea, retired. Then, Dot — quite well again, she said, quite well again — arranged the great chair in the chimney - corner for her husband; ...I think she must have had a kind of notion that it was a coaxing, wheedling, little stool.

She was, out and out, the very best filler of a pipe, I should say, in the four quarters of the globe. (*Ibid.*, p.180)

注：decline 謝絶する

coax, wheedle だだめる, すかす  
out and out = completely

visitorとは南アメリカからひそかに帰国したCalebの息子Edwardで、耳が遠いことを装っている。Johnの扱う荷物で「留め置き」となっていて、彼はJohnの家に一夜泊まる。これがEdwardであることを、Johnはまだ知らないが妻のMaryは知っていて、Edwardの許婚とTackletonがむりやり結婚式をしようとしている折から、Maryはそれを何とかして防ごうと秘策をねっている。quite well again, she said, quite well againは、体調が元に戻ったことを言っていて、自由間接話法である。

他の自由間接話法の例：

And when the Expedition first discovered her, she would listen to no terms at all, but said, an unspeakable number of times, that ever she should have lived to see the day! and couldn't be got to say anything else, except, 'Now carry me to the grave;' which seemed absurd, on account of her not being dead, or anything at all like it. (*Ibid.*, p.231)

注：Expedition Fielding 夫人の搜索遠征隊

be got to say 使役動詞getの受け身…  
(彼女が)言わせられる

herはEdwardの許婚であるMay Fieldingの母親で、上の文は強欲老人のTackletonからMayを取り戻し、Edwardとの結婚に成功したお祝いに、皆で宴をやろうとしてその母親を探しに大挙して出掛けて行った時のことである。Fielding夫人がその話を初めて聞いて言った言葉が、上のthat ever she should have lived to see the day!(ああ、人間に生まれてこんな嫌な日に出会おうとは)である。形の上では間接語法になっているが、わずかに最後のパンクチュエーション、dayの後の!が、自由間接語法の余地を残している。これは最大の注意を払って読むべき箇所であり、これによって搜索遠征隊が何と言って説明しようとしてもとりあわず、ただ自分の言いたいことを何度もまくしたてているFielding夫人の姿が、読者の眼前に彷彿としてくるのである。さらに母はこの後、自分について次のように言う：

...and begged they wouldn't trouble themselves about her, — for what was she? oh, dear! a nobody! — but would forget that such a being lived, and would take their course

in life without her. (*Ibid.*, p.231)

注：nobody とるに足りない人間

これは次のようになる。...and said, 'You wouldn't trouble yourselves about me, — for what am I? oh, dear! a nobody! — but would forget that such a being lived, and would take your course in life without me.' 正に自由間接語法である。Mayの母の滑稽な姿が躍如としている。次の例も同様である。

'He's going, John, I think!

Not at all. He was only going to speak.

'If you please, I was to be left till called for,' said the stranger, mildly. 'Don't mind me!' (*Ibid.*, p.170)

注：be left till called for 引き取りに誰かが来るまで(運送屋に)留め置かれる

物語の初めの方で、夫が変な荷物を荷車に背負い込んで帰って来たので、Dotが「あの人は出て行くんでしょう」と尋ねると、夫はNot at allと今にも言いそうになるが、この時耳の遠いのを装っていたEdwardが引き取り手が来るまで留置にしてくれと言うのである。このNot at allは自由間接語法で、夫のJohnの言葉として影で響く。そしてその響きが読者に伝わってくるという効果がある。

最後にみられるダンスの情景は時制は現在形で描かれる。これも「語り」ということで説明することができる。つまり歴史的現在である。そしていよいよ最後では「非現実」となり、今までそこに居て楽しく踊っていた登場人物達がみな姿を消し、ただ作者と一匹のCricketと壊れた子供の玩具が床の上に横たわっているだけということ、との関連で見る

と、ここには現実と非現実とが交錯し、大層ドラマチックである。あるいは次のようにも考えられる。MayとEdwardが踊り始めてからは時制は現在形となり、この時点で物語は終って後はエピローグとなり、話し手が直接観客・読者に終りの挨拶を送る時である。現在形は話し手から読者への、直接の語りなのである。そしていよいよ最後に書齋で、作者が一人でこの物語を書き終える場面がくる。これこそは語りの名手としてのDickensに相応しい幕切れである。

最後の方でEdwardとMayの結婚が終わり、両親たちが一緒になったところで共に挨拶などが行われている時、作者はDotの可愛いホステスぶりを述べて、

I wouldn't have missed Dot, doing the honours in her wedding - gown, my benison on her bright face! for any money. (*Ibid.*, p.232)

注：doing the honours 主人役を演じる  
benison 祝福  
for any money どんなことがあっても

これは地の文である。ここにもI, my, !, など、自由間接話法の要素がある。これに続く突然の出来事としてTackletonの遣いが入って来て、次のような会話が交わされる。

'Mr. Tackleton's compliments, and as he hasn't got no use for the cake himself, p'raps you'll eat it.'

And with those words, he walked off.

There was some surprise among the company, as you may imagine. (*Ibid.*, p.232)

注：Mr. Tackleton's compliments タックルトンさんからよろしく

hasn't got no use = has no use.

後の方のyouがここでは読者として使われている。

### 3. ドラマ性

こうして語りや自由間接話法は、作品にドラマ的性格を与えることになるが、次のように色々な形をなして表れている。

#### ・言い切らない文体

自由間接話法はさらに発展して、言い切らない文体となる。やかんとこおろぎとが音の出し比への競争をしている。下文のthe excitement of a raceはその事を述べている。このような内容自体、クリスマスの物語として大層ふさわしく、読む者の心を和ませるものであるが、その表現の仕方がまた興味深い。

There was all the excitement of a race about it. Chirp, chirp, chirp! Cricket a mile ahead. Hum, hum, hum -- m -- m! Kettle making play in the distance, like a great top. Chirp, chirp, chirp! Cricket round the corner. Hum, hum, hum -- m -- m! (*Ibid.*, p.162)

上の1行目の後の方以後は「言い切らない文体」ということができる。つまり述語動詞がないのである。すべて状況語的な言い方で終わっている。またChirp, chirp, chirp!にしても、言わば裸の表現であり、読者にそのまま伝わってくる。従ってこれは自由間接話法の一つであると言うことができる。この種の表現が至る所にある。

さらに、巧みな自由間接話法は或る人物の言葉を地の文に感じさせる。

...and didn't defer himself at all to the Indigo Trade, but said there was no help for it now, and in Mrs. Fielding's summing up, was a good-natured kind of man — but coarse, my dear. (*Ibid.*, p.232)

注：defer himself...to に納得する  
summing up 概評

問題はこの my dear である。これは「ちょっとあなた」とか「だわね」の意味である。つまり直接話法のみに使われる言葉である。これによってこの前の部分までもがMrs. Fieldingの言い種(概評)であることがはっきりする。文全体の主語はDotの父親のOld DotでMr. (男性) であるのに対して, was a good-natured... 以後は, 従ってMrs. Fieldingの言葉という二重構造となっている。

・様々な呼び掛け

この作品の中には様々な呼び掛けがある。my dear!とか my Bertha! (*Ibid.*, p.224) とか。この my Bertha!は何と訳すればよかろうか。日本語では「バーサったら」か。バーサに関するepiphanyの後の、父親の言葉であるから「バーサ」でよいか。ともかくこれはドラマ性の一つの要素だと考えられる。

Little woman, how she sobbed again! John Peerybingle would have caught her in his arms. But no; she wouldn't let him. (*Ibid.*, p.228)

下線部は作者からの読者への語りかけである。また Little woman は作者のDotへの親しみを込めた呼び掛けである。

・名詞止め

The look that Tackleton bestowed upon him, and the start he gave! (*Ibid.*, p.229)

上のような名詞止めも、語り掛けから発展したものと考えることができる。

4. 言葉の面白さ

・しゃれ

同じ言葉を使って別の意味にしたり同じ言葉で二様の解釈をする場合である。最後の方でDotの母とFieldingの母とが出会う場面は次のようである。

Then, Dot's mother had to renew her acquaintance with May's mother; and May's mother always stood on her gentility; and Dot's mother never stood on anything but her active little feet. (*Ibid.*, p.232)

注：renew her acquaintance with 旧交を暖める

stood on を誇る, の上に立つ

この一つ目のstood onは「を誇る」だけの意味であるのに対して、二つめのstood onは「を誇る」と「の上に立つ」の二つの意味が重なっている。その意味でしゃれである。

最後に皆でパーティーをするが、それに居合わせようとJohnは自分の代理人と犬と馬に仕事を任せて来てしまったが、無責任な代理人は犬と馬を仕事先の酒場で置きっ放しにする。犬は大いに不満で初めはその酒場の暖炉の前に上がり込んで寝そべっていたが、あと馬をけしかけて独断で勝手に帰ってくるのである。

その時の描写：

But suddenly yielding to the conviction that the Deputy was a humbug, and must be abandoned, he had got up again, turned tail and come home. (*ibid.*, p.233)

注：yield to 受け入れる

conviction 確信

humbug ろくでなし

turn tail = turn one's back, run away

問題は turn tail である。この意味は上の注の通りだが、この場合は犬自身が tail を持っており、文字通り尻尾を巻くこともできることが面白いところで、アイロニーとしゃれが出てくる。尻尾を持っていない者が主語であればさしずめ「尻尾を巻いて逃げ出す」ともなるだろうか。次も同様である。

...Miss Slowboy, in her little errors of judgement, may be said to have done equal honour to her head and to her heart; and though these did less honour to the baby's head, which they were the occasional means of bringing into contact with deal doors, dressers, stair-rails, bedposts, and other foreign substances, still they were the honest results of Tilly Slowboy's constant astonishment at finding herself so kindly treated, and installed in such a comfort-able home. (*ibid.*, p.166)

注：deal 松の木製の

do...honour to …に名誉を施す

dresser 食器戸棚

install する、住み着かせる

foreign とんでもない

bedpost 寝台柱

stair-rail 階段の手摺

上の to her head and to her heart のうち、heart は必要だが head は必ずなくてはならないものでもない。しかし次の baby's head までくると、これはどうしてもなければならぬもの、いやむしろ her heart 以上に必要であることが分かる。「スロウボーイ嬢は自分の頭と心に名誉を施した……」という言い方はあまり明確な意味を持つものではなく、これはむしろ次の、赤ん坊の「頭」を家具などにふんだんにぶつける彼女のそそっかしさを滑稽に表現するための準備なのだ。このことは baby's head まで読んできてやっと分かるしゃれである。次も言い回しによるしゃれで、大阪の漫才に通じる面白さがある。

With these words he carried it off, and carried himself off too: merely stopping at the door, to take the flowers and favours from his horse's head, and to kick that animal once, in the ribs, as a means of informing him that there was a screw loose in his arrangements. (*ibid.*, p.230)

注：there was a screw loose in his arrangements 手筈に手違いがあった

Edward の若い許婚 May を横取りしようという野心が崩れ去ったことを知った老悪人 Tackleton (上の he) の行動の描写である。carried it off はその場をうまく取り繕うこと、carried himself off は立ちさることで、しゃれしている。その他のしゃれ：

'A dot and' — here he glanced at the baby — 'a dot and carry — I won't say it, for fear I should spoil it; but I was very near a joke. I don't know as ever I was nearer.' (*ibid.*, p.163)

注：spoil it しゃれを台無しにする  
was very near a joke しゃれをもう  
少しでうまく言えるところだった  
I don't know as(=that)ever I was  
nearer こんなにしゃれがうまく言  
えそうになったのは初めてだ

これは小柄な妻が小さい赤ん坊を抱いている  
のを見て、JohnがYou are a dot and carry a  
baby(「ちびのくせに赤ん坊をだいてら」)と、  
a dot and carry one (算術の加算で、十にな  
ると点を打って一桁あげる)とa dot and car-  
rier(ちびと運送屋)の三つのしゃれを言おう  
としたものである。

So plain, too! Bless you, you might have  
understood it like a book — better than some  
books you and I could name, perhaps.  
(*Ibid.*, p.161)

注：name 列挙する

やかんが歌う単純な歌について言っている。  
like a bookはphrase(慣用句)でpreciselyの  
意味、従ってbookそのものの意味は直接はな  
い。それを著者はそのbookの意味をもう一度  
掘り起こして、今度は本来の「本」の意味で  
使っている。次も言葉そのものの遊びで、  
しゃれに分類される。

...and Tilly had been bred by public char-  
ity, a foundling; which word, though only dif-  
fering from fondling by one vowel's length,  
is very different in meaning, and expresses  
quite another thing. (*Ibid.*, p.166)

注：public charity 公共の施設

foundling 棄て子

fondling 愛児

foundlingとfondlingの言葉の上の違いに目  
を付けた、面白い議論である。

・繰り返し

繰り返しはその事が持つ滑稽さと同時に、  
必ず内容の面白さを伴う。作者もそれを狙っ  
ている。

Let me narrate exactly how it happened.  
I should have proceeded to do so, in my very  
first word, but for this plain consideration  
— if I am to tell a story I must begin at the  
beginning; and how is it possible to begin at  
the beginning, without beginning at the  
kettle? (*Ibid.*, p.159)

注：proceeded 着手する

itはこの物語の始まり。こおろぎよりも先に  
やかんが音を出し始めたという、ただそれだ  
けのことを、繰り返しを用いて強調してい  
る。次はこれに対照が加わる。

He was often near to something or other  
very clever, by his own account: this lum-  
bering, slow, honest John; this John so  
heavy, but so light of spirit; so rough upon  
the surface, but so gentle at the core; so dull  
without, so quick within; so stolid, but so  
good! (*Ibid.*, p.163-4)

注：was often near to something or other  
very clever 何かにつけて大層気の利  
いたしゃれが言えそうなことがよく  
あった

by his own account 彼自身の話だと

stolid = not betraying emotion

lumbering = moving heavily and clumsily



ここにはsoの繰り返し、heavyとlight, roughとgentle, dullとquick, stolidとgoodの各対照が同時にみられる。そしてそれによって何よりもこの愛すべきJohnという人間のひとりとなりが読者に感じられて、笑いを誘うのである。

・音響効果

擬声語、音もまた、ユーモアを醸し出すものである。

There was all the excitement of a race about it. Chirp, chirp, chirp! Cricket a mile ahead. Hum, hum, hum — m — m! (*Ibid.*, p.162)

この箇所は先に自由間接話法の言い切らない文体として引用したが、それだけで終わらせるのは惜しい。このム、ムと言う音はまさに、やかんのずんぐりした、太っちょの体から出るにふさわしい音となって読者には響く。そして両者の競演は、これまた次のように滑稽の極みとなってゆく。

Until at last they got so jumbled together, in the hurry-scurry, helter-skelter of the match, that whether the kettle chirped and the Cricket hummed, or the Cricket chirped and the kettle hummed, or they both chirped and both hummed, it would have taken a clearer head than yours or mine to have decided with anything like certainty. (*Ibid.*, p.162)

注：jumbled together 一緒くたになった  
with anything like certainty 少しでも確信をもって

ここに至って、我々は腹をかかえて笑いこぼるのである。

・擬人用法

無生物から出る音やその動作の面白さは、広く擬人用法とすることができる。cricketは生き物だが、やかん、暖炉、時計などは無生物でありながら、日常生活の中で人間と親しく接しているものである。これらがあたかも神経を持つかのように縦横に活動する。これはシェイクスピアでさえ及ばないレトリックである。

物語の最初からkettleの擬人的描写が見られる。二つが音の競演をしている様子は先に述べたが、その他にkettleの蓋が中へ落ちて、どうしても上がってこない様子は次のように描写される。

To sum up all, the lid, resisting Mrs. Peerybingle's fingers first of all turned topsy-turvy, and then, with an ingenious pertinacity deserving of a better cause, dives sideways in — down to the very bottom of the kettle. And the hull of the Royal George has never made half the monstrous resistance to coming out of the water, which the lid of that kettle employed against Mrs. Peerybingle, before she got it up again. (*Ibid.*, p.160)

注：turned topsy-turvy ひっくり返る  
ingenious pertinacity 器用な強情さ  
better cause もっと立派な大義名分  
hull 船体  
Royal George 旗艦ロイヤルジョージ号のことで、1782年Spithead沖で停泊中に沈没、何度も試行の後やっと1840年引き上げられた。ここではやか

んの蓋が底へ落ちてどうしても取り出せないことにたとえている。

一つでも余分に取りたい気持ちから出たものであろう。

60年近くも失敗を重ねてやっと引き上げられた、あの大英帝国の旗艦ロイヤルジョージ号になぞらえるほどの念の入れようである。

・脚韻

次に紹介する kettle の歌は一見普通の文章と見紛うが、行書きすると次のようになる。

It's a dark night,...and the rotten leaves are  
lying by the way;  
and above, all is mist and darkness, and below,  
all is mire and clay;  
and there's only one relief in all the sad and  
murky air;  
and I don't know that it is one, for it's nothing  
but a glare;  
of deep and angry crimson, where the sun and  
wind together,  
set a brand upon the clouds for being guilty  
of such weather;  
and the widest open country is a long dull  
streak of black;  
and there's hoar-frost on the finger-post, and  
thaw upon the track;  
and the ice it isn't water, and the water isn't  
free;  
and you couldn't say that anything is what it  
ought to be;  
but he's coming, coming, coming! — (*Ibid.*,  
p.161)

みごとな脚韻である。しかもだいたい 13-15-16 の音節を揃えている。下から三行目の ice it の it という無駄なものを入れたのは音節を

・言葉の置き換え、内容によるもの、頭韻

In doing which she lost her temper, or mislaid it for an instant; for, the water — being uncomfortably cold, and in that slippy, slushy, sleety sort of state wherein it seems to penetrate through every kind of substance, patten rings included — had laid hold of Mrs. Peerybingle's toes, and even splashed her legs. (*Ibid.*, pp.159-160)

注：slushy ぬかるんだ

sleety 霰混じりの

pattens ぬかるんだ道を歩く時に靴の下に付ける履き物

which の先行詞は引用されていないが、火にやかんを掛ける Peerybingle 夫人の行為である。あまりの寒さに夫人は機嫌を損ねるのである。misaid it の it は前の部分の temper で「機嫌」の意味である。だから misaid it は「機嫌を置き損なう」としゃれている。これは lose (失う) と mislay (置き損なう) という二つの言葉の微妙な相違からくる内容上の面白味によるものである。

上の引用の少し前にも Dot すなわちチビさんの Peerybingle 夫人が Presently returning, less (=prep.) the pattens (and a good deal less, for they [=pattens] were tall and Mrs. Peerybingle was but short) (やがて夫人が帰ってくると、彼女はパティンの分だけ背が低くなっていた (それも随分低くなって、というのは、パティンは高くピアリングル夫人は背が低かったからである) のようにユーモアたっぷりに描写されているからますます

効果がある。slの頭韻が三つとsのそれが続く。

・造語

... and chirruped its little body into fifty pieces, ... (*Ibid.*, p.162)

chirrupedという言葉は、chirpより出た造語で、こおろぎの鳴く声をなるべく微妙に写し出そうとする努力から出た言葉である。またそもそも「第一章」にChirp the Firstと章にこおろぎの鳴き声を当てている。

むすび

以上、Dickensのレトリックを目にとまるままとりあげてみた。このようなレトリックによって、この作品の登場人物たちの心情が微細にわたって理解でき、作品の内容と価値がより一層豊かになると思われる。

とは言えそれは複雑なニュアンスを含んでいて、挿し絵も含めるとOxford版で七十数頁もある作品で飛び飛びにしか紹介できず、前後関係がはっきりしないために話の筋を充分理解できないことから、そのレトリックそのものが分かりにくくなる恨みがあるが、各引用で前後関係を充分説明し、難解な言葉にはなるべく注を付けたので、或る程度の内容と話の雰囲気分かっていただけだと思う。

こうして物語の最後で、今までのレトリックを締めくくるにふさわしいような最大のレトリックに読者ははづかることになる。自由間接話法のところでも、語りと話法の面から述べたが、最後でクリスマスにふさわしいあの楽しいダンスの情景が突如として霧散し、著者の私がかた一人取り残され、私に見えるものはただ炉端で歌う1匹のこおろぎと床に

ころがる壊れた玩具一つだけだったという描写である。ここに至って読者は日本の古典劇である夢幻能にも似た体験をすることになる。そしてヴィクトリア朝の持つペーソスを一瞬にして感じ取るのである。

私の研修の当初の課題はディケンズとその時代を幅広く研究することだったが、研究を進めていくうちに、時代とその精神を写し出す彼の言葉、レトリックに興味を深まり、それに集中することとなった。そしてそれを探究する中で、そのレトリックを通して感じ取られるヴィクトリア朝の人々の多彩な心情に触れ、「幅広く」とまではいかなくとも、活気あふれる時代精神の一端に触れることができたと思う。

参考文献

- Charles Dickens. *Christmas Books*. Oxford: Oxford U.P., 1997.
- Connor, Steven. (ed.) *Charles Dickens*. London/New York: Longman, 1996.
- Davis, Paul. *The Penguin Dickens Companion*. Penguin, 1999.
- Holisbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. Themes and Hudson, 1972.
- Jaffe, Audrey. *Vanishing Points Dickens, Narrative, and the Subject of Omniscience*. Los Angeles/Oxford: University of California Press, 1991.
- Mcknight, Natalie. *Idiots, Madmen, and Other Prisoners in Dickens*. New York: St. Martin's Press, 1993.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford U.P., 1999.
- Waters, Catherine. *Dickens and the Politics of the Family*. Cambridge U.P., 1997.

ウェット, L.K. 小池滋, 石塚裕子訳  
『チャールズ・ディケンズ』西村書店, 1989  
年。  
ウィルソン, アンガス 松村晶家訳 『ディ  
ケンズの世界』英宝社, 1981年。  
G.K. チェスタトン著作集〈評伝編〉2  
『チャールズ・ディケンズ』春秋社, 1992年。  
山本忠雄 『ディケンズの英語』研究社, 昭和  
32年。  
市川三喜 『英文法研究』 研究社, 昭和9  
年。  
小池 滋 『ディケンズとともに』晶文社,  
1993年。

田辺昌美 『チャールズ・ディケンズとクリ  
スマス』あぼろん社, 1977年。  
松村昌家 『ヴィクトリア朝小説のヒロイン  
たち』創元社, 1988年。  
松村昌家, 荒木邦起 『ディケンズ小事典』研  
究社, 1994年。  
吉田孝夫 『ディケンズのことば』あぼろん  
社, 1978年。

— こが まさかず —

国内研修：佛敎大学教授

指導者：京都大学 佐々木徹助教授